

講義は役に立っているか

富岡 昌雄

環境政策・計画学科

定年退職に当たり、日頃考えていることを述べてみたい。

私は本学の前身である滋賀県立短期大学に25年、本学部に17年、併せて42年勤務してきた。その間、助手時代の16年を除き、26年間講義を担当してきた。

学生の本分は学業であり、学業の中心は講義である。これは建前をいっているのではない。

近頃の学生は講義への出席率が極めて高い。受講登録をしているだけの学生は別にして、単位を取得する意志のある学生は90%以上出席しているのが常である。私の学生時代などは、大まかな感覚であるが、講義科目への出席率は2割程度だったのではないか。出席率の高かったのは語学など特定の講義科目と、体育実技や実験科目・演習科目に限られていたように思う。

また、教師の立場からすると、現在では休講はきわめて難しい。やむを得ず休講した場合には、必ず補講をしなければならない。これも私の学生時代のことであるが、学期中にしばしば休講があるのは普通のこと、補講があったという記憶もない。それだけでなく、「開講通知」などという奇妙な慣例さえあった。学期が始まって、掲示板に「開講通知」が掲示されるまで授業が始まらないのである。しかも、夏休みに入る1週間前は、たいてい休講である。

半世紀前に比べ、今日の学生にとっては講義が遙かに重要な位置を占めているように思う。

○

私は学部の講義科目を4科目担当している。

2年次前期の「持続可能社会論」は導入的科目として位置づけている。環境政策を学ぶ学生が、環境保全と両立する、目指すべき社会像を確立するのを促すことをねらいとしている。そのため、関連する図書を「少なくとも1冊」読むことを課題として課している。授業では私自身の「持続可能社会論」を語る。学生は私の持続可能社会論と自分が読んだ図書の著者の持続可能社会論とを比較し、それを踏まえて自分自身の持続可能社会論を模索するよう求められる。参考文献としてあげてある図書の中には私の考えと近いものもあれば、正反対のことを述べたものもある。どの図書を選ぶかは学生の自由である。

受講生は生物資源管理学科の学生を含めて100人近くに達し、大講義室で、マイクを使って講義をしている。

2年次後期の「資源経済学」は基幹的科目である。自然資源利用を巡る問題を素材として、経済学的思考に触れさせることをねらいとしている。受講生は履修の前に「経済学Ⅰ」を履修していることが望ましいが、必須とはされていない。時間の制約上、取り上げるトピックスは限定せざるを得ない。新古典派の標準理論を中心に、エコロジー経済学的な発想も含めて講義している。

3年次前期の「環境会計」も基幹的科目である。簿記・会計関係の授業科目はほかにないので、簿記・会計の初歩を講じた後、いくつかの代表的な環境会計手法について解説している。簿記の学習に際しては簡単な記帳・決算練習も取り入れている。

高橋准教授との分担科目である、3年次後期の「国際環境資源論」では、私の関心を優先させて、「特殊講義」的に運用している。講義の内容は農業環境政策である。学科の性格上、農業政策を深く学びたいという学生はさほど多くないと考え、「農業を素材として」、環境政策の目的と手法を考えさせることにねらいをおいている。

○

講義が成果を上げる、つまり学生にとって「役に立つ」ためには、少なくとも3つの条件がそろわなければならない。第1は教師の講義する内容と講義の仕方が適切であることである。第2は学生が教師の意図に対して適切に反応することである。第3は講義科目の構成と配列、すなわちカリキュラム編成が適切であることである。

カリキュラム編成についてはここでは取り上げない。この問題は学部や学科で組織的に取り上げるべき問題であり、おいおい取り上げられていくであろう。

○

私は以前から、講義の最後に毎回質問票を書かせるということを続けてきた。これは他大学に勤務していた私の大学院時代のある先輩に示唆されて始め

たものである。質問がなければ感想でもよいといっている。

質問を見ると、講義の中で理解しにくかったところはどこかがわかる。それを踏まえ、次の時間の初めに復習をする。よい質問が出ると、質問に順次答えているだけでよい復習ができる。実際、「前回わからなかったことが今日の復習でよくわかった」との反応もしばしばあった。また、思いがけない質問に出会って補足説明をすることもできる。たとえば、「生産量は自然資源の投入量と人工資本の投入量によって決まる」という関係を

$$Y = F(R, K)$$

という式を使って説明したときのことである。YもRもKも十分に説明したので、これでわかったはずだと思っていた。ところが、ある質問を見て驚いた。「Fって何ですか」、というのである。思いもかけなかった質問である。そういえば確かに、Fについては何も説明しなかった。

こういう意図で始めた質問票であるが、学生の多くはどうやらこれを「出欠票」と見ているのではないかということに、やがて気づいた。ある年などは、多くの学生が名前を書いただけの白紙を提出した。さすがに白紙はまれだが、あまり意味のないようなことだけしか書いていない質問票も少なくない。受講生の3分の1くらいは、始めから終わりまで机に突っ伏して寝ている。それでもほとんどの学生が何らかの質問や感想を書いてくるのである。中には次の週に取り上げる予定の事項に関する質問を書いているものもある。おおかた、あらかじめ配布してある講義資料を見て、適当に書いたのであろう。これなどは評価が簡単だが、「よくわかりました。質問はありません」、という感想などは評価に窮する。満点を付けるべきか、零点を付けるべきか。

質問票を書かせるというこのやり方は、受講生50人ぐらいが一番やりやすいように思う。100人もいと読んで整理するのが大変である。逆に20人くらいでは、質問に多様性がなく、つまらない場合がある。

○

本を読ませて感想を書かせるというやり方にも、成果もあれば、裏切られたこともあった。

この方法を導入したときには、「本を読んでみたらおもしろかった」、「本を読んでから講義を聴いたらよくわかった」、など、うれしい反応もあった。無理にでも本を読ませるという機会を作ることは意義があるだろう。

しかし、がっかりしたこともある。導入科目がI年次に配当されていた頃のことである。2回生になったある学生が、「2回生にも本を読んで感想を書く課題を与えてください」、というのである。比較的よくできる部類の学生がである。本を読むおもしろさを体験すれば、読書を習慣化するようになるだろう、という期待は通じなかったようである。

また、ある年には名前以外は全く同じというレポートが一组提出されたことがあった。調べてみると、二人が別々に、前年に履修した学生からファイルの提供を受けたものとわかった。もし盗作したのが一人だけであれば、発見するのは難しいと思う。

○

教師は学生が学ぼうという意志を持っているという前提で講義をする。学生のねらいが学ぶこと自体ではなく、単位を取得すること、卒業することではないとしたら、講義を有用なものにするのは難しいと思う。

二十歳前後の4年間というのは、人間の成長にとってきわめて貴重な時間である。その時間を無駄に過ごさないために、学生諸君には何かを「学び取る」という欲をもって、教室に来て欲しい。講義受講に費やす時間の割合が高いことを考えると、これが学生生活の質を大きく左右すると思う。

○

もちろん、講義が学生にとって役に立つかどうかに対しては、教師にも責任がある。ほかのことと同様、教師の講義能力も経験によって高まるものと考えられる。すなわち、講義能力の一部は時間の増加関数である。これは経済学者が技術進歩と呼ぶものの一般的な特徴でもある。

しかしそれだけではない。体力と同じく脳力も、加齢とともに成長し、そして衰える。この年になると、知っているはずのことが思い出せないことなどしょっちゅうである。横綱千代の富士は引退に際して「気力の衰え」をその理由に挙げた。「体力の」ではなく、である。私も以前は、学生がわからないという何とかしてわからせてやろうという気になったものだが、その気力も今ではすっかり衰えた。

講義能力関数には時間とともに減少する項もある。65歳定年は妥当な慣習だと思う。